

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 23 日現在

機関番号：32407  
 研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2010～2012  
 課題番号：22520508  
 研究課題名（和文） GET：語彙の意味概念について 認知的アプローチと概念拡張  
 研究課題名（英文） Get:It's semantic concept – Conginitive approach and Conceptual Extension  
 研究代表者  
 市川 泰弘（ICHIKAWA YASUHIRO）  
 日本工業大学・工学部・准教授  
 研究者番号：00223090

## 研究成果の概要（和文）：

本研究では以下のことが明らかとなった。Get の意味概念は規則性もなく語彙項目の中に列挙されているのではなく、人間の認知能力の発達に伴い、拡張していく。Get は 13 世紀に名詞を伴って生じ初め、その後、様々な要素が当該動詞の後に生起するようになった。その生起状況は OED および 13 世紀から 19 世紀にまでの 300 の文献を調査したところ、その歴史的発達の順番と人間が get を習得していく順番に多くの点で類似していることがわかった。この習得は語彙の概念の拡張によって生じていくと考える。この拡張は基本となる概念[COME](1,2 人称への移動)と動作主、対象、起点(starting point)、着点(landing point)が関連する。拡張は動作主の拡張、対象の拡張、起点の拡張、着点の拡張からなり、それぞれ人間の認知能力の発達に伴って、具体的なものから抽象的なものへと進んでいく。このように考えることによって語彙項目に記載される get は拡張の理論と基本的な語彙項目によって示されることが可能となる。

## 研究成果の概要（英文）：

This research shows that semantic meanings of *get* are not listed randomly in the lexicon, but some of them are extended from a basic semantic concept within the framework of extension theory proposed in Kajita(1977, 1997). From a diachronic point of view, *get* first occurred in 13<sup>th</sup> century. It occurred with an NP. After that it occurred with particles, PPs, adverbs, past participles and present participles. Almost the same order of occurrence of these constructions of *get* is observed in the digital materials which are open for public in University of Virginia Libray (300 titles in all). We also investigate the occurrence in data from Tomasello (1992), Collins Word Bank, and CHILDES. We found that the occurrence of the constructions of *get* is almost the same. The extension has something to do with some semantic concepts of *get*. These are 'COME' (Move to 1<sup>st</sup> or 2<sup>nd</sup> person), 'Agent', 'Target', 'Starting point', and 'Landing point'. (About these concepts, see Langacker (1999, 2002, 2008).) We proposed that 'Agent', 'Target', 'Starting point', and 'Landing point' are extended in the course of language acquisition. This extension is considered related in part to cognitive development.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	200,000	60,000	260,000
2012 年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総計	900,000	270,000	1,170,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：語彙・意味・概念拡張・機能範疇・言語習得

### 1. 研究開始当初の背景

近代英語の研究は文法形式や語彙の用法などの歴史の変遷を中心として行われている。

(佐藤 (2008)、Mizoguchi (2007) など) また、Chomsky を初めとする言語理論に基づいた研究 (Tanaka (2006) など) などもある。伝統的な言語研究から最新の言語理論に基づいた研究などさまざまな研究がなされている中で、最近認知言語学の立場からの言語の変遷に関する研究が起こりつつある。認知言語学のアプローチでは八木橋 (2008) などが人間の言語習得への認知発達が歴史的言語発達と同じであるという仮説に立って説明を加えている。

この人間の言語発達には認知言語学的アプローチの他に梶田 (1977、1997、2002) の動的文法理論 (拡張理論) からのアプローチが考えられる。さらにChomsky 等の言語理論に基づいた研究はかなり行われているが、これらの言語発達を考慮に入れた言語理論に基づく言語の発達の研究はあまり行われていない。

動的文法理論では特定の語彙がどのようにその形式として確立されたかが研究されてきた。例えば、研究代表者である市川 (1996) は *have got to* がどのように成立したかを議論し、語彙の発達ではAsakawa (1994) は *appear* の語彙発達を論じている。またIchikawa (2003) では *Get+-ing* が持っている特異な特性を語彙の発達の観点から研究し、Ichikawa (2008) は *get* を用いた受動態の特性が人間の認知能力の発達と関連して生じていることを論じた。

ここで興味深い部分として出てきたのが *get* という動詞である。この動詞はさまざまな文法形式で用いられる。たとえば *get to*, *get -ing*, *get arrested* など、*get* 自体がほとんど動詞としての意味を出さず補助的に使われたり、動態動詞として使われたり、静態動詞として使われたりもする。さまざまな用法を *get* という動詞は持っているにも関わらず、この動詞だけに注目して研究が行われたことは今までにないように思われる。

Tomasello (1991) が生まれてから2歳になるまでの言語発達の中でどのような意味が生じてきたかを研究しているものがあるが、これは特定の言語習得で生じる現象としてしか捉えていない。

### 2. 研究の目的

本研究の目的英語の動詞である *get* に着目し、この動詞がどのように成立してきたか、すなわち元来どのような意味で *get* という形式が使われ、歴史的にどのような意味が生まれてきたのかを研究することを目的とする。特に、従来の歴史言語学的なアプローチではなく、言語習得、すなわち認知言語学的な側面に着目して語彙の意味がどのように確立してきたのか、さらに *get* を用いた熟語 (文法形式) が生じたのも認知言語学的な側面から説明し、さらにそれが歴史的事実と合致するかどうかを検証していく。

### 3. 研究の方法

この研究で重要な役割を演じる認知言語学的アプローチと動的文法理論がどのようなものであるのか、また現在の研究状況はどのようなものであるかを理解するために、現代英語をターゲットとして拡張理論での個別研究、認知言語学での個別研究を調査する。次に英語の語彙の意味拡張に関する先行研究があるのかどうか、また先行研究が存在した場合、具体的にどのような内容であるのか、また本研究にその内容が関連しているのかどうかを調査する。

現代英語で *get* はどのような語彙的意味を持つのか、また *get* を用いた語法 (文法形式) はどのようなものがあるのか、これらの特徴を明らかにする。ここでは、現代の文法書 (*The Cambridge Grammar of the English Language*, *A Comprehensive Grammar of the English Language* などの現代英文法書の記述を始め、さまざまな文法学者がどのように記述しているかを調べ、さらに実際に英語を母語とする人々のインフォーマントチェックを広範囲におこない、実際の使用状況等を研究する。さらに実際の使用状況についてコーパス (BNC, WORDBANK) を用いて調査し、それぞれの語法とその頻度について調べる。さらに2000年以降の新聞等の中で同様にどのような語法があるかそれぞれの頻度と共に調査する。

*Get* が歴史的にいつ頃この形になって現れ始め、その意味はどのように広がり、変化をしてきたのかを通時的観点から分析する。ここではVisser (1973) などの歴史的観点から見た研究所でどのように示されているかを確認しながら、当該語彙の変遷をまとめる。

上述までに明らかとなるそれぞれの用法・頻度をデータとして認知的アプローチ（動的文法理論と認知発達にもとづく理論）に基づいて以下の3点について研究し、歴史的言語発達に置いて認知的情報が影響を与えて語彙の意味が拡張したり、特定語彙の文法形式の拡張が行われる可能性があることを明らかにする。

- (1) Get の語彙が初めて生じた時の基本的な意味からどのように様々な意味が派生してきたのか（拡張してきたのか）
- (2) get を用いた形式がどのように派生してきたのか（拡張してきたのか）
- (3) それぞれの派生（拡張）の間には認知での原理が関連しているのか

認知言語学的アプローチはLangacker (1999, 2002, 2008, 2009)に基づいて考察を加えていく。

#### 4. 研究成果

現代英語での Get の用法は先行研究として Jespersen (1931)、Quirk, et al (1975)、Declerck (1991)、Huddleston & Pullum (2002)での記述を概観し、get 自体が本動詞、助動詞としての様々な用法を確認した。また歴史的観点から Visser (1963)の記述を概観した。さらに OED での下位範疇の生じる要素の年代順は、名詞、場所を表す不変化詞、場所を表す前置詞・副詞、過去分詞（使役の意味）、形容詞、過去分詞（受動態として）であった。

年	生起した品詞
1200	名詞
1300	場所・位置を表す不変化詞
1350	場所を表す前置詞句・副詞
1500	名詞+過去分詞(使役の意味で)
1583	to-不定詞
1590	形容詞
1652	過去分詞(受動態として)
1897	現在分詞

さらに、University of Virginia の電子図書館で公開されている文献(13~19世紀)300作品を無作為に抽出し、そこでの get の生起状況を調査した。

年代	作品数	get の生起数
13世紀	1	0
14世紀	1	0
15世紀	2	71
16世紀	43	382
17世紀	50	801
18世紀	47	1801
19世紀	156	10892

get は生じ始めた頃を例として見ると、公開されている 13~15 世紀の文献は以下の 4 作品で、共起する要素は名詞と前置詞句（主に場所を示す）であった。これは OED が示す生起状況と一致するところである。

	年	著者・タイトル	GET	+ ADJ
1	1215	King John of England . Magna Carta	0	0
2	1345	Bury, Richard de . The Love of Books: the Philobiblon of Richard de Bury	0	0
3	1470	Malory, Sir Thomas. Le Morte Darthur: Sir Thomas Malory's Book of King Arthur and of his Noble Knights of the Round Table, Volume 1	41	0
4	1470	Malory, Sir Thomas. Le Morte Darthur: Sir Thomas Malory's Book of King Arthur and of his Noble Knights of the Round Table, Volume 2	30	0

しかし、形容詞の生起について調査すると OED が示している例より早い段階(1531年に 'get tired'、1534年に 'get free')で生じていることがわかった。('16~18世紀における Get+形容詞(句)に関する覚書」*Kanazawa English Studies* 27:322-355 2010年7月参照)

興味深い点は場所を表す不変化詞(Particle)が非常に早い段階で生じていることである。また、初期に生じる要素の共通点が「場所」を示すものである。

次に共時的な観点からこれらの構文の生起状況を Tomasell(1992)および Collins Word Bank, CHILDES の資料で調査を行った。その結果それぞれの生起時期は以下の通りになった。

月	型式	例
16	get-it	Get-it
17	Get 不変化詞(place)	Get-out
19	Get NP	Mommy get sauce
	Get 不変化詞(place)	Weezer get-out
20	Get NP 不変化詞	
21	Get NP to NP(PPY)	Get raisins to me
23	Get Adj	10892
24	get PP	get in
26	get V-en	
42	Get V-ing	

それぞれの型式（あるいは構文）がどのように生じたのかを考察した。理論的基盤は Kajita(1977)で提案され、その後 Kajita (1997)等で洗練されてきている動的文法理論（拡張理論）である。人間の言語能力は言語習得過程の中で可能な文法へと拡張していく。その原理は言語的要素と非言語的要素が含まれる。ここでの拡張は意味概念の拡張なので、語彙の持つ意味を細かく見ていく必要がある。意味表示については Langacker (2000, 2002)が提唱する認知言語学の意味概念表示を基礎に考えた。get の意味概念には「動作主」「対象」「起点」「着点」という概念が含まれる。構文の拡張はこれらの概念の拡張によって生じる。動作主の拡張は被発話者から発話者へと拡張する。

get out: 「対象である自分を外へ出してという意味」

↓  
「自分(対象として)が外へ出たいという意味」

対象の拡張は文脈で理解できる対象から発

話される語彙として生じることによって生じる。起点の拡張は前置詞句を生じさせることで行われる。

get NP out → get NP out of NP

着点の拡張は着点に生じる名詞句が具体的な内容を示すものから抽象的な内容を示すものへと拡張することで生じる。これはAsakawa (1994) が主張した認識論的拡張 (epistemic extension) が関わっていると考えられる。

今後の研究としてはそれぞれの拡張をさらに細かく考察していくと、非常に細かな拡張へのステップがあると思われる。さらにそれぞれの構文の使用頻度が大きく拡張に影響していくと考えられる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

①市川泰弘「Get の拡張-子どもの言語習得の観点からの考察」(査読有)*Kanazawa English Studies* 28:245-270 2012 年 12 月

②市川泰弘「16～18 世紀における Get+形容詞 (句) に関する覚書」(査読有)*Kanazawa English Studies* 27:222-255 2010 年 7 月

[学会発表] (計 5 件)

①市川泰弘 t “A Note on *get+ ~ing & get + to-infinitive* in dynamic & cognitive view” 金沢大学大学院英語研究会 2013 年 3 月 15 日 金沢大学

②市川泰弘“A Note on *get-passive* in Dynamic & Cognitive view” 金沢大学大学院英語研究会 2013 年 2 月 15 日 金沢大学

③市川泰弘“*Get: It’s semantic / conceptual extension from historical and cognitive approach (2)*” 金沢大学大学院英語研究会 2011 年 7 月 31 日 金沢大学

④市川泰弘“*Get: It’s semantic / conceptual extension from historical and cognitive approach (1)*” 金沢大学大学院英語研究会 2011 年 5 月 27 日 金沢大学

⑤市川泰弘“*The Emergence of get + adjective construction: From historical and cognitive approach*” 金沢大学英文学会 2010 年 11 月 20 日 金沢大学

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

#### ○出願状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

#### ○取得状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

市川 泰弘 (ICHIKAWA YASUHIRO)  
日本工業大学・工学部・准教授  
研究者番号：00223090